

D2390 レポート邦訳

親愛なる研究グループ交換(GSE)チーム！

大阪で過ごした5週間について語りたことすべてをこの報告に盛り込むことはむろんでできません。このプログラムはチームの誰にとっても本当に忘れられない経験になりましたし、研究グループ交換(GSE)の準備や手配をして下さったすべての方々に対して心から感謝の意を表し、本当に深く心の底から“どうもありがとうございました — ドウモ アリガトウ ゴザイマシタ”と申し上げます。

この報告では、集中的で多様なプログラムの内容についてお伝えするだけでなく、私達が今回の滞在をとおして思ったこと、考えたことや成果について少しでも伝えられればと思います。日本の暮らし、社会、文化を部分的にはありますが徐々に理解していく過程で、多くの問題について突っ込んだ、そして実りある討論がチーム内でなされました。それは、初めての興味深い文化的環境の中でこのように長い時間を一緒に過ごしたことで私達チームが得た予期せぬ素晴らしい恩恵と言えるでしょう！

GSE チームのリーダーとしての仕事は実に簡単なものだったと言わねばなりません。それは研究グループ交換(GSE)委員会委員長の加藤さんとプログラムコーディネーターの松岡さんのご指導により大阪の国際ロータリー第2660地区が実に行き届いた準備をして下さったことに加え、互いに補い合って強く前向きなチームワークを築き上げたメンバーの態度や人柄によるものです。GSE プログラムの目的である、“受け入れ国の制度や生活様式を体験し、参加者自身の職業について海外ではどのようになっているかをつぶさに見学し、個人的にも仕事上でも関係を築き、意見を交換する機会を、参加者に与えること”は、十分に達成されたと確信しています。

私達はこの報告をテーマ別にまとめ、全員で内容、写真、コメントを考えました。ですから、これはチーム共同作業の産物と言えますが、報告全体の編集を担当してくれた Lisa と、写真に関するすべてを担当してくれた Ingemar には、特に感謝していることをここに述べておきたいと思います。

ぜひこの報告を楽しんでいただければ幸いです。そして私達が大阪での忘れ得ぬ時間の中で感じた素晴らしい興奮を少しでも感じていただければ、と願っております。

Mats Bruzaeus

長年にわたり、国際的なスウェーデンの企業数社で幹部として — 製造部門、製品開発部、マーケティング組織を率いて — 働いた後、現在は独立して主に日本に重点を置いた事業コンサルタントとして働いています。東京のスウェーデン大使館で科学技術参事官として6年間、その後、アト日本株式会社で2年間、社長として働いた経験は、日本と日本におけるビジネスの状況に関する正しい理解を与えてくれました。私は今、その経験を、それぞれの製品やサービスで日本市場へ参入することに関心を示している企業のために使おうとしています。

同じように長年にわたり幅広く人材問題を扱ってきた経験から、最近デンマークの企業であるガルダ・グループと日本に子会社を設立し、その指揮をとることで合意しました。ガルダ・ジャパン株式会社は日本の企業や組織に人事管理と人材開発(HRM&D)に最適な様々な種類の業務上の心理分析ツールを販売、ライセンス供与していきます。

時間ができると、吹奏楽団やジャズオーケストラで演奏したり、もう何年も自分のバンドも持っていますし、日本でも東京を拠点に活動しているジャズバンドと定期的に演奏したりしています。軍隊でも、そして個人的にもずっと飛行機の操縦をしてきたので飛行機そのものと、空を飛ぶことには深く興味をもっています。子供の時から電子工学にもとても強い興味をもっていました。今でもアマチュア無線の免許を持っていて、私のコールサイン(識別信号)はSM7CPNです。

Jens Ingemansson

医療産業に従事して2年、プラスチックやポリマーを原料とした機器の製造をしています。私の初めて就いた仕事がエネルギー部門で主に地域暖房システムだったのとは、ずいぶん違っています。中央アジアと東ヨーロッパ担当の営業部長として4年間働きました。この地域を希望したのは、この仕事が地域の人々に大きな変化をもたらすいい機会になると常に感じられ、また結果に対してオープンで前向きな反応が返ってくるからです。

社会人としてのキャリアをスタートさせるまでに、スウェーデンで2番目に大きいルンド大学(Lund University)で数年間、スイスのETH(Eidgenössische Technische Hochschule)で1年間、様々な分野の科目について学びました。経済や科学技術、物理学に重点をおいて勉強しましたが、考古学やドイツ語などの人文系科目もとっていました。このように幅広く色々学んできたことが、将来いろんな違った分野での仕事に就くチャンスを与えるといえるのですが！

暇があれば自然の中で過ごすのが好きです。なかでもハイキングが一番関心があり、年に数回はアルプスの山々を歩きます。またオリエンテーリング競技としてのカヤックも私が興味をそられるものです。ゴルフは始めたばかり(あまりうまくありません)ですが、室内ホッケーやバドミントンなどの室内競技もやっています。

日本での5週間の滞在中、とても興味深い、そして寛大な社会を体験したことは私にとってたいへん貴重なものだったと思います。この旅で得たことをこれからの私のキャリアに、特に日本と関係のある仕事をする機会があれば、生かすことができるだろうと確信しています！

Lisa Kirsebom

Lisa Kirsebom, 29歳です。4年前から自分の会社でフリーランスの記者として働いており、主に科学分野の記事を書いてスウェーデンの新聞や雑誌に売っています。営利企業での研究はもろろのこと、大学の研究や一般の科学に関する話題も扱っています。私の専門分野は医薬とバイオテクノロジーですが、化学、物理学、生物学、技術科学についての記事も書きます。この仕事は日々新しく学ぶ機会があり、どんなことでも興味をもったことについて詳しく調べ、できるだけ幅広い分野をカバーできるようにしています。言うまでもなく、私は自分の仕事に幸せを感じています！

仕事以外の時には、仲のいい友人たちや家族と過ごす時間を楽しんでいます。読書や料理(そして食べること!)も好きですし、音楽を聴くことも演奏をするのと同じくらい好きです。聖歌隊で歌ったり、学生ミュージカル劇団にも長年関わってきました。旅をすることにもたいへん興味を持っています。ここ何年かの個人的な“ハイライト”は、中国への3週間の旅行、アメリカをひと月かけて横断ドライブしたこと、ロンドンでの2週間のインターンシップ、そして度々の短期旅行でブリュッセルやローマ、ドレスデンなどのヨーロッパ各地を巡ったことです。

私は夫の Andreas Ekstrom とルンド(Lund)に住んでいて、今年(2005年)、私達夫婦にとって初めての子供が生まれます。この子は、確かに私だけでなく、チームのメンバーや受入家族、出会った人々と関わりを持ち、日本での旅の間ずっと“特別チームメンバー”として、私を幸せにし、感動させてくれました。

Ingemar Larsson

2、3年ほど前に Albireo AB という現在働いている会社を共同で設立しました。経歴としては、電気工学で修士号(MscEE)を取り、以前は電気通信と携帯電話の部門で働いていたことがあります。

私の仕事は経営者としての役割とエンジニアとしての役割の両方です。我々の会社は最近まで主としてコンサルティングに重

点を置いてきたのですが、今は独自のアイデアを売り込むことにシフトしているところで、いくつかの技術も開発し、特許も申請しました。これらの技術は顧客にライセンス供与することができるようになるでしょうが、いずれは自社製品の開発もしていくつもりです。

技術者としての私の仕事はデジタルカメラとカメラシステムの研究開発で、携わるようになってほぼ4年になります。携帯電話やPDA（パーソナル・デジタル・アシスタント）などの小型化された携帯用電子機器向けのカメラシステムもあります。

空いた時間には色んなことに興味を持って取り組んでいます。スキューバダイビング、水泳、合気道など様々なスポーツや、旅行、写真、料理、ピアノやギターなど楽器を演奏すること、読書、コンピューター、そして語学の勉強も。

今回この日本への GSE プログラムに応募したのは、個人的にたくさん興味のあることがあったからです。一番の興味はなんといっても私の仕事に関係しているもの - デジタルカメラ - 長い間ずっと、日本が最先端を走り続けている分野です。それだけではなく、異国情緒たっぷりの文化や、魅力的な人々、私達とは全く違う言語、そしてその長い歴史から学びたいと思ったからです。行く前から期待いっぱいだったのですが、今、この旅を終えて日本での素晴らしい時間が期待以上のものであったと感じています。

Sofie Qvarfordt

Sofie Qvarfordt です。マルメにある Region Skane で国際関係のコーディネーターとして勤務しています。Region Skane とはスウェーデン (Skane) 地方における行政の最高意思決定機関で、主にヨーロッパの情勢や国際協力に関して意思決定者に提案をしています。EU (欧州連合) に関する情報やこの地方でのプロジェクトに対して EU の財政的支援を受けるための多くのプログラムについても情報を提供し、また、他の地方とパートナーとして協力関係を築き、交流をはかることができるかどうか見極めるための分析や評価も任されています。

現在 29 歳で、海辺の町、ヘルシンボリ (Helsingborg) で育ちましたが、これまでに色々な国で暮らし、学び、働いてきました。 Lund 大学 (Lund University) で政治学の修士課程を修了し、フランスとヨーロッパの法律制度についても学びました。余暇には水泳やエアロビクスなどのスポーツを、夏場にはスキューバダイビングをするのも大好きですし、料理、音楽、自然の中で過ごすこと、そして家族や友人と過ごす時間も楽しみです。

海外に旅をして違う文化や言語について学ぶことには常に興味がありましたが、この日本への旅ではそれはたくさんの素晴らしい人々に出会い、受入家族と過ごせたことが何よりも一番でした。受入家族の方々には私達に対して充分すぎるほどの温かいもてなしと善意をもって親切に接して下さいました。

大阪探訪 Sofie Qvarfordt

エアポートリムジンバスの窓から初めて垣間見る大阪の街には高層ビルがそびえ、交通量も多く、たくさんの河川と橋があった。これだけ栄えているこの街は“水の都”としても知られ、260 万人もの人々が暮らしている。大阪府全体では東京に次いで二番目に多い 880 万人もの人口があり、これはほぼスウェーデン一国の人口に相当するものである！

到着して2日目に GSE プログラムの学友の方と一緒に大阪の中心街へ出かけ、まず感じたのは、人の多さと通りのにぎわい。学友の方がお寺や神社、レストラン、商店街など数多くの興味深いところへ連れて行って下さった。そして色々なお店を出たり入ったりしながら、手づくりのものを見たり、大阪の名物を味わいつくしたのである。

大阪という都市は、企業や大学、研究機関が集中する商工業の町としてその任を果してきたが、大阪市立大学はこの町の国際交流の充実と拡大を目指し、主導的役割を果たしてきた。大阪は松下電器産業、シャープ、三洋電機などの世界的に有名な一流企業をはじめとする日本のメーカーが最も多く集まっているところでもあり、5週間の滞在の中で、これらの企業をいくつか訪問することができ、また大阪が進取の精神にあふれていることで知られ、実に多くの中小企業がそのユニークなアイデアと専門知識で名高いということを知ったのだ。シャープペンシルや即席麺、それから回転寿司など数多くの新しい製品も大阪で生まれている。

大阪は商工業の中心として知られているが、名所旧跡や興味深い美術館・博物館など非常に多くの観光資源もあるということに気付く。大阪とその周辺は豊かで美しい自然環境に恵まれ、公園や近代的な娯楽施設もたくさんある。滞在していたホテルの隣は美しい大阪城公園で、私達は何度も日曜にはここでリラックスして過ごした。

大阪はまた関西経済圏の中心でもあり、2,330 万人が暮らす巨大市場である。関西という言葉はおおよそ大阪、京都、神戸の各都市を中心とした地域のことを指しており、その文化や歴史に関連した言葉として使われている。GSE チームはこの地域全体の経済活動、社会、文化について知る素晴らしい機会を与えられたのだ！

大阪のロータリーの皆さんと Lisa Kirsebom

ロータリアンではない4名のチームメンバーにとって、大阪のロータリーの皆さんとの出会いは日本での体験の中でも当然ながら重要な部分を占めていた。そしてその4名を率いるチームリーダーの Mats Bruzaeus にとっては日本のロータリーの方々、以前に2年間、東京ロータリークラブの一員であった時とは違う、新しい形で出会う、またとない機会となった。

大阪のロータリーでの体験は以下の4つに分類できる；公式のクラブミーティングへの参加、滞在の最初と最後に開いて下さったパーティーに出席したこと、毎日どんな時にも1時から6時(時には8時!)まで私達の研修に付き添って下さったロータリアンの方々との出会い、そして最後に、もちろん、受入家族の方々とも過ごしたこと。

受入家族については、この報告の別の章で述べるが、ロータリアンの家庭にお世話になったことで、結果として平均的な日本人よりもずっと広いスペースを使って生活していた、ということだけ述べれば充分かもしれない…。日本の住宅はスウェーデンに比べてとても小さいことが多いと、本で読んだり、人に聞かされていたりしたので、時には家族の誰かと一緒に部屋になることもあるかと予想していたが、そんなことは一度もなかったし、それどころか自分専用の洗面所やフロアすべてを - 家一軒まるごとの時もあった！ - 私達のために貸して下さることが幾度もあった。

公式のクラブミーティングのほとんどは日程に組み込まれていたが、それ以外の時でも時々、研修の合間にクラブの方と昼食を(これが事前に予定されていたことだったとは知らずに)ご一緒したり、全員がそれぞれ受入家族と一緒にミーティングに参加することもあった。一番印象に残ったのは、ミーティングで私達が目の当たりにした、出席者の非常に高い関心と反響であり、スウェーデンに関する20分か30分ぐらいのプレゼンテーションを準備していったのだが、実に多くの反応が得られた。でも、私達がミーティングに到着して部屋に入ってきただけでクラブの皆さんが拍手をして下さったり(!)、クラブの方一人一人に紹介してどの方も必ず立ち上がりお辞儀をして下さったことは、私達にとっては新鮮で、たいへん驚き、感激させられる経験だった。

ミーティングで特に気付いたのは…。

…旗と歌。ミーティングに使われる部屋はたいてい、国際ロータリーの標章とともに日本とスウェーデンの旗で飾られていて、どのミーティングもだいたい両国の国歌を斉唱して始まり、その後ロータリーをたたえるいくつかの歌へと続く。時には全員で大きな輪になって手をつなぎ、歌を歌いながら拍子に合わせてつないだ手を前後に振ったりするのを、驚きながら私達も楽しんでいった。私達の知る限り、こういったことはスウェーデンのロータリーのミーティングでは行われたことがないと思う。

…贈り物とバナー。今回の訪問の記念として贈り物を頂くことが多かったが、贈り物という習慣も日本の文化の重要な部分なのだと思った。ほとんどすべてのミーティングでその地域のクラブとスウェーデンで私達のサポートをしているクラブとの間で、バナーの交換もした。

…寄付金。日本では、特別な時にクラブの活動に対して寄付をすることがよくあるというが、今回の私達の訪問がまさにそうで、会員の方たちがクラブに寄付をして私達の訪問を祝って下さった。

…年齢や男女の割合。大阪のロータリーは40歳以上、もしくは50歳ぐらいの会員が大半を占めるが、ロータリーの会員になるには地域である程度の指導的役割を担っていることが必要であるのを考えれば、驚くことではない。これはスウェーデンでも同じで、スウェーデンではロータリーの会員のうち、女性は11%（私達の第2390地区では16%）である。日本でのこの割合は5、6%と聞いたが、労働市場における“ロータリー年齢”の日本人女性の動きが活発でないことを考えれば、むしろ高いと言えよう。この5%の女性会員は色々なクラブに均等に分散されているわけではない。女性会員のいるクラブでは、出席者の5%以上が女性であることも珍しくないが、逆に多くのクラブではまったく女性がいない。これらのクラブのいくつかで耳にしたのは、女性の入会を歓迎する会員がいる一方で女性が会員になることに強く反対している会員がいるということだ。

毎日付き添って下さる方々の協力和献身は私達の誰にとってもまったく予想外で、時にはその付き添いのロータリアンの方々に通訳をして頂くこともあったが、たいていはその日の予定や行事について説明するためだけに来て下さっていたのである。（そのうえ京都では、食品売り場で迷子になることがないようにと、メンバーそれぞれに一人ずつロータリアンの方がついて下さった…。）何度も言うようだが、私達が毎日楽しく、快適に過ごせるように、この新しい友人たちが尽力して下さったことには驚き、感動した。— バスの中ではお菓子をすすめ、市場では色々な地元の名物を買って下さり、茶道や着物を紹介するために自宅へ招待されることもあった。また、もう少しゆっくりとしたペースにスケジュールを変更したほうがよいか、それとも、お手洗いにいく時間を取るだけでよいか、など、毎日の中で私達に必要なこと、私達が望んでいることは何かをただひたすら考えて下さった…。

大阪のGSEプログラムの学友が準備された歓迎パーティーと同じく歓送迎の晩餐会もとても素敵な経験だった。こういった準備の行き届いた行事において私達を迎え入れて下さる人々の親切や明るさにメンバー全員が心打たれた。

交換プログラムでスウェーデンに行ったことがあるという人がほとんどの、GSEプログラムの学友の皆さんと一緒に大阪の中心部をゆったりと見物してまわったことは素晴らしい“贈り物”だった。この友人たちにありがとうと言いたい — とてもよい時間が過ごせました！

職業研修日 Mats Bruzaeus

人材問題、経営管理、科学技術、寿司の調製に、日本酒の醸造と、かなり広い範囲の、少し独特な職業研修先を希望したこと

で、いろんな異なった体験ができる、実に様々な分野での研修を受けられた。少しは日本語の基本的な知識があるとはいえ、現実の仕事や職場環境について、深く総合的に理解するのはいつも難しいものだ。それでもなお、職業研修は、興味深く、労働生活と文化の両面についての見識を深めることができたと思う。

3月14日、枚方にあるK-CATVを訪ね、大阪エリアにおけるケーブルテレビの仕組みについて学ぶとともに、— スタジオやコントロール室など — 会社の施設を見学させてもらう。メディア部門の進歩を知ることはいつでも一般的な関心事だが、この訪問は私にとっての職業体験としては、あまり意味のないことだったかもしれない。

京阪電気鉄道株式会社では、業務について非常にわかりやすい説明をひととおり受け、人事部のさかいさんのご協力でこの会社における人事関係の業務について、採用の手順や人材育成、管理者養成など、多少なりとも特長を把握することができた。常にとってもオープンに説明して下さったので、言葉の壁があるにも関わらず、専門的見地から見てかなり多くの興味深く、役に立つ情報を得られたのである。

翌週の3月24日の職業研修日はそれなりに良いものだったが、あまり専門的なことに重きを置いていなかったかもしれない。キャノンのショールームやヨドバシカメラを見てまわり、テクノロジーやビジネス手法に関してさらに具体的な情報を増やすことができた。電子機器のワンダーランドで過ごしたこの日の研修で、日本のテクノロジーや開発レベル全体に関する理解がそれなりに深まった。

3月29日、チーム全員で大阪大学を訪ね、総長と歓談したり、ロボット工学科では興味深く、印象深く、見学させてもらう。午後には、チームメンバーのSofie Qvarfordtとともに吹田ケーブルテレビジョン株式会社という、また違うケーブルテレビ局を訪ね、ロータリー(GSE)チームのアサヒビール株式会社訪問という話題を提供することになった。しかし、職業体験としては訪問の目的が今ひとつはっきりしなかった。

大関株式会社を4月5日に訪問、酒の醸造について、その製造工程と化学的な側面の両方からたいへん幅広く、そしていくつかの点では細かいところまで説明を受ける。すでに知っていた知識と合わせ、酒の醸造において生じる複雑さと職人技についてより一層知識と理解を深めることができた。午後の訪問先は、淀川工科高等学校で、ブラスバンド部のリハーサルも見学させてもらったが、ここでは文化と音楽の両方を体験できたとし、長年アマチュア音楽家として活動していることもあってとても楽しく鑑賞できた。

最後の職業研修日の課題は人材と調製食品に絞らねば。集中して有意義な朝を過ごしたザ・パック株式会社への訪問では、会社沿革や成功している事業開発について充分な理解を得ただけでなく、人材問題に関連する会社の業務の数多くの点において深い見識を得た。ほんの短い間とはいえ、すし萬で集中的に見習いをしたことで、私の職業研修プログラムの終りは、実践的で、文化的、かつ食欲をそそるものとなったのである。ベテランの寿司職人と店の社長の見事な教えを受けて、基本を習い、相当な仕上がりの大阪寿司一式を作ることができるようになった。今では、驚きとより一層の尊敬の念で、寿司を作るという芸術がどれほど奥深く手の込んだものか、身をもってわかるのである。

職業研修日 Jens Ingemansson

私の経歴はかなり多岐にわたり、特にこれといったものに重点を置いていないこともあって、職業研修プログラムを作るのは大変だったことだろう。しかし、日本の受け入れ側は、エネルギー分野に興味があるという希望を特に聞き入れるなど充分な配慮をしてくれたと思う。が、このプログラムをより良くしていくためには、— 最後の週に大阪ガスを訪問した時のように — 深く突っ込んだところまで知ることができるような訪問がもっとできれば有り難かった。

まずは最初の週の月曜日に独立行政法人 産業技術総合研究所(産総研(AIST))を訪問することから始まった。産総研では主に日本政府からの助成により、ナノテクノロジーやバイオテクノロジー、遺伝子研究などの新しい技術や、科学のまだこれからの分野に重きを置いて、日本各地に15のそれぞれ特色のある研究拠点が、総勢3,200名の従業員が働いている。訪問した大阪南西部の拠点はエネルギー問題を扱っていて、主として充電式電池と燃料電池の2つの分野においてその工程の化学的な側面を重点的に研究している。特に様々な種類のポリマー材料に関して、電気分解を促進し制御することを目的とした多くの研究がなされている。

この訪問は、化学についてそれほど学んでおらず、様々な種類の化学的手法でどんな結果が得られるのか充分には知らなかったこともあって、たいへん興味あるものだったし、少なくともその可能性について少しは理解を深めるのに役立った。

木曜日には、現在の専門に唯一直接関連している第一プラスチック株式会社を訪問したが、この会社の製品のひとつが携帯電話向けのプラスチックシェル - 私の会社(Nolato)も作っている製品 - だったこともあり、興味深いものとなった。日本企業は何をするにも実に狭いスペースを有効に使っている。むしろ、これは体格差(スウェーデン人は幾分か大きい)と大いに関係があるが、お互いが近くで働いていることでより生産的に仕事ができるのも本当だろう。コミュニケーションがより効率的になり、異なる意見の交換がよりしやすくなる。

3週目の火曜日、職業研修というよりも普通の研修に近いものではあったが、大阪大学を楽しく訪問させてもらって、総長と大いに語り合い、非常に興味あるロボット研究室とサイバーメディアセンターの二つを見学した。日本の人々はスウェーデン人に比べてロボットにあまり抵抗がないようで - 将来の生活を脅かすものではなく、快適にしてくれるチャンスと見なしているようだった。

午後は、レーザーを使ってどんなことができるのかを勉強することに費やした。個人的にはレーザー核融合装置に一番興味をそそられたが、これは明るくクリーンな未来に対する希望をくれるものなのだ。

4週目の職業研修として、手術中に患者を眠らせるための吸入麻酔剤と麻酔鎮静剤の製造を主に行っている丸石製薬株式会社を訪れたが、ミーティングを終えて感じたのは、どれほどたくさんの中小企業が日本にはあるのだろう、ということだった。日本人が会社を興すのには素晴らしいアイデアがあれば、それほど資金がなくてもいいようだ。

午後の時間は淀川工科高等学校を訪問してブラスバンド部の練習も見せてもらったが、日本の学校がどういうものか、日本の学生がどんなふうなのか、とてもよくわかった。 - 日本の他の学校でもこのようにたいへん行儀よくしているのかどうかはわからないけれども。

最後の週は準備万端で一番興味のある職業研修に臨んだ。訪問先の大阪ガス株式会社においては、日本のエネルギー市場とあわせて世界のエネルギー市場について、大阪ガスが取り組んでいる開発と将来可能な計画についてとても役立つ情報を得た。大阪ガスそのものと、その多岐にわたるビジネスおよび一般的な運営の仕方についても、概要の説明を受け、最後に燃料電池プロジェクトと多様な研究経路について詳細な説明をもらって、その具体的な成果を知ったのである。日本とは違うエネルギーの必要性(より以上の暖房 - より少ない冷房)とエネルギー税制の下でスウェーデン市場において燃料電池を使ってどんなことが可能になるのか、この訪問によって深く考えさせられた。

全体としては今回の職業研修において得た情報を有効に使っていきと信じているし、エネルギー部門と様々なエネルギー源についての情報は必ずや最も有効なものとなるだろう。

職業研修日 Lisa Kirsebom

今回の研修旅行にあたって職業研修中に日本のメディアと大阪地域における科学研究開発についてもっと学ぶことができれば - どちらかというメディアよりも研究の方を重点的に - と希望していたが、大体において用意されていたプログラムにはたいへん満足だった。そのプログラムは以下のように行われた。

- 1日目 - 金龍寺にて日本の茶道を学び(たいへん興味があると言っていたことである)、関西医科大学では、お会いした池原教授から幹細胞と骨髄移植の研究について伺う。
- 2日目 - 放送会社のNHKを少しだけ見学し、大阪歴史博物館を訪れてから最後に田辺製薬株式会社を訪問し、その環境対策とES細胞の研究について学んだ。
- 3日目 - GSE チーム全員で大阪大学を訪れ、宮原総長にお会いし、ロボット研究室とランゲージコンピューターセンターを見学した。その後、チームメンバーのJens IngemanssonとIngemar Larssonと一緒にレーザー工学施設とナノ科学・ナノテクノロジーセンターを訪れた。
- 4日目 - 読売新聞を訪れ、何人かの科学担当記者にお会いした後、インキュベータ(起業支援施設)会社のバイオ・サイト・キャピタル株式会社、代表取締役社長の谷氏とお会いする。
- 5日目 - バイオテクノロジーの会社である東洋紡績株式会社を訪問、その後、大阪市立大学医学部附属病院を見学してまわった。

スケジュールのほとんどは私の興味と希望に沿っていた。(たぶん歴史博物館を除いて - ここは4週目にチーム全員でも訪れることになっていたので、2回見るようになった - そしてNHKでは、会社の代表者に会うことはなく一般公開の展示を少しだけ見学。)

職業研修中、折に触れ、十分な学習体験を妨げるものがひとつだけあったが、それは言葉の壁だった。ある分野についてあまり詳しくない状態であればあるほど十分に情報を得ることがより難しくなる - ただ単に、お会いした人々に質問の内容をきっちり伝えられないことがよくあったからだ。

こういった場合に案内の方々ばかりでなく通訳の方々にも、常に力を尽くして頂いたが、自分の専門ではない科学の分野において適切に訳することはたいへん困難なのである。このことで時には自分の思う100%ではなく、75%にしか届かないように感じることもあった。しかしながら、ミーティングはいつも意味深く、興味をひかれるものだったし、受け入れ側の委員会がこれらの職業研修を可能にするために尽力して下さったすべてに対して大いに感謝の意を表したい。

職業研修日 Ingemar Larsson

交換プログラムの職業研修の部分では、自分の仕事に関連する特定の分野に興味があった。デジタルカメラ分野で開発と研究に携わっていることもあり同じ分野の企業を見てみたかったし、そこで働いている人々と話してみたかったのだが、このように自分の興味を明確に定義したことは、研修のプラスになるよりは、むしろ障害になってしまった。

企業にとってハイテク技術の開発はある面で非常に取り扱いに慎重を期する部分であり、また大抵の場合、非公開になっているものである。こういったことは私の分野でも有り得ることで、その分野で職業研修を手配するのは、会社の機密保持の面から特に厳しいものだったらしい。

最初の職業研修日は大阪電気通信大学での一日。この大学では幅広い範囲のテーマをカバーしており、トランジスタの新素材(基礎物理と電子工学研究)研究に使われている多様な粒子加速器から、コンピューター室や、3Dアニメーションのスタジオにビデオ編集室、それから生物医学部門までたくさんの異なった分野のものが見受けられ、実に様々で興味深いと思った。

二つ目の職業研修は Mats と一緒に、このメーカーの製品が並べられ、デモンストレーションされているキャノンのショールームへ行ったのだが、多くの来場者がいて、その大半が中年以上の女性だったのにはずいぶんと驚いた。多くの場合、こういう女性たちが、時間的にも財政的にも余裕があると考えられている消費者を代表しているのだ。この日は、エレクトロニクスと家電の大型店であるヨドバシカメラの店舗にも行って、かなり圧倒されてしまった。

三つ目の職業研修はチームメンバーと一緒にほとんど大阪大学で過ごし、ロボット研究室を訪れ、台車付きのサッカーロボットと歩行ロボットも見せてもらった。サイバーメディアセンターでは、人間にたいへんそっくりなロボットも少しだけデモンストレーションしてもらったが、このロボットは、テレビの女性ニュースキャスターをモデルにして作られたようだ。午後はナノテクノロジーとレーザー工学の学科を訪問、レーザー核融合研究の巨大な施設はとても興味深く、見応えあるものだった。

四つ目の職業研修においては、株式会社ケイ・オプティコムと株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ (NTTドコモ) を訪問した。その日最初に訪れたケイ・オプティコムでは、会社概要と、関西エリアで実に 65,000 キロメートルにも及ぶ光ファイバーによる基礎的設備について説明を受けたり、顧客に声やデータのコンテンツを供給するための色々な手法を学んだ。サポートやメンテナンスの要望に応えるだけでなくネットワーク上の送信と障害の監視もしているネットワークコントロールセンターのひとつにも行った。

午後には NTT ドコモサービスセンターとその展示ホールに行き、間違いの電話について顧客が苦情を言ってきた時にどうやって対処するのか見せてもらった。展示ホールでは、実際に売っている様々な新しい機種の手話を見せられた。また、今までに見たことのないお茶用の温水器に接続されているネットワークのデモンストレーションもしてもらった。

最後の職業研修日にはシャープ株式会社を訪問、午前中にシャープの歴史・技術ホールをじっくりと見学し、その歴史について色々知ることができた。昼食が終わってからは太陽電池プラントを訪ねたが、とても興味深く、得るものがたくさんあった。この日は、世界で最も古い木造寺院である法隆寺を訪ねるチャンスもあった。

私の職業研修をまとめると、非常に興味深いものであったし、たくさんのお話を学んだ。もし、さらに希望があるとすれば、直接私の仕事に関係するものをもっと見たかった。が、あらゆる種類のテクノロジーに興味をもっていたので、この研修は大いに得るところがあったし、たいへん感謝している。

職業研修日 Sofie Qvarfordt

私の働いている組織 (Region Skane) は保健医療サービスだけでなく、地域開発問題についても責を担っているが、この分野では数多くの国際協力に関する合意がなされている。そこで、日本における地方自治体の責務について、特に国際業務をどのように扱っているか、もっと勉強したいと思った。他の地域から何が学べるのかモニターした結果、官民提携についてや、予防のための健康管理、文化、デザインに関しても、もっと情報を得たいと考えた。

大阪府の国際室を訪問したことはとても興味深く、各国からの代表団の受入はもちろん、協力合意の調整、国際的な行事や会議の開催など、その業務には色々共通点があることがわかった。互いにこんなに遠く離れた二つの国が国際業務を執り行う上ではこれほど共通したやり方だということに興味をそそられた。関西エリアにおける国際交流及び国際協力活動の中心となるように設置された財団法人 大阪国際交流センターも訪問したが、市民レベルでの国際交流の場を提供することで、歴史や文化、その他の社会情勢に焦点をおいた国際的な相互理解の推進が

期待されている。

大阪府の国際経済交流課を訪問した際に、産学官の連携に関しては大阪地区にこういった連携によるプロジェクトがたくさんあることを知った。スコーネ (Skane) にある機関も数年前に大阪の彩都ライフサイエンスパークを実際に訪問したことがあり、スコーネと大阪の地域間でライフサイエンス関連分野での連携の可能性は大いにある。商工会議所では、私の故郷スコーネと大阪地域の企業間で提携先を見つける可能性について話し合った。

官民提携のもうひとつの例は、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン (USJ) である。ウォーターワールドのショーを楽しんだり、いろいろなアトラクションを見て回ったりと USJ で一日を過ごせる楽しさに加えて、大阪市と米国人 法人 ユニバーサル・スタジオ・インク、そして日本全国の数多くの有力な企業と金融機関による提携事業である USJ のバックグラウンドについて知ることができたのも有り難いことだった。大阪の湾岸地域に USJ を作ったひとつの理由は、典型的な工業地帯から観光客にとって魅力的な場所に再開発したいという大阪市の要望による — こういった再開発は私の町でも同じように行われているところである！

大東市役所では、様々な側面から市の業務と、予防のための健康管理の分野でかなり成功したプロジェクトについて、非常に興味深いプレゼンテーションを聞いた。そのプロジェクトとは高齢者の健康維持と病気の予防を補助する運動や文化的行事及び機能性食品といった要素を組合せたもので、スウェーデンでももっと実施していけることのひとつである。今回訪問した際には、大東市民の高齢者の方々と一緒に体操に参加する機会を与えられた！

大阪市のごみ焼却場に連れて行ってもらった時には、仕事にはほとんど関連性がない所なので少しは驚いたが、すぐにそれがデザインに関連するものを見たいというこちらの希望に沿ってのことだとわかった。この焼却場はごみ処理と環境保全が適切に行われていることを示す目的で建てられた。環境を守るため、有名なオーストリアの環境保全建築家、Friedensreich Hundertwasser 氏が外観のデザインを担当、この焼却場を見学ツアーの目玉にしようとした。その素晴らしいデザインは右の写真 (原文 14 ページ下の写真) でご覧いただけるとおりである！

職業研修の間に、Mats と吹田ケーブルテレビジョンを訪問したが、親切なスタッフの方々のご好意により、その翌週に GSE チームがアサヒビールを見学したことが吹田市民の皆さんに向けて放送された！

歴史と密接に関係している社会 Jens Ingemansson

スウェーデンと日本の、歴史と歴史的建造物や歴史的な場所に関する見方には明らかな違いがある。スウェーデンの人々が古い建物や場所に価値を見出すのは、大抵の場合、それが単に古いものだからである；どうやら私達は歴史的事実や歴史的な場所に関係する時代そのものに興味をかき立てられるようだ。多くの日本人々は、それに対して、実際にどの時代の建物かということにはあまり関心がなく、どんな儀式やしきたりがあり、決まったその場所で行われているか、といった場所の持つ象徴的かつ伝統的な価値に、より興味があるようだ。

日本で5週間滞在し、いくつかの歴史ある場所や博物館 — 茨木市立文化財資料館や大阪歴史博物館のような — を訪ねたことで、なかでも特に重要な二つの時代があるとわかった。

その一つ目は、1603 年から 1868 年まで続いた江戸時代である。天皇と数々の軍事政権 (幕府) がその当時ですでにほぼ千年間、政権をめぐって争っていた。奈良と京都、そして現在の大阪府は、違う時期にそれぞれに首都だったことがあり、大阪は日本の交易と商業の中心だった。

しかし、1603 年に徳川家康が政権をとり、日本の首都を江戸、

今の東京に移し、武士 — 侍 — が社会で一番上の階級である封建制度を導入した。と同時に、日本が統制の厳しい社会になるに従って、以前は周辺諸国、特に中国と朝鮮半島に対して開かれていた社会は終わりを告げ、二百年以上もの間、日本人は世界の他の国々と非常に限られたコミュニケーションしか持つことがなかった。その上、1549年にフランシスコ・ザビエルによって日本にもたらされたキリスト教は禁止されたのである。

つい最近といってもいい時代まで、強力な統制による鎖国社会であったことが現在の日本人の持つ様々な特性をもたらしたのだろう；何でもきちんとしようとする；細かいことにこだわる；新しいものや知識に対して幅広く関心と好奇心を持つ、そしておそらくは上記のように、儀式や象徴性に対して強い興味を持っていることも。

二つ目に重要なのは、第二次世界大戦の時代である。広島への日帰り訪問では、原爆ドームを見て、平和記念資料館を見学し、戦争の悲惨で恐ろしい結末を目の当たりにした。1868年の明治維新で日本が開国した後、愛国主義の力によって国がひとつにまとまったことがひいてはロシアや満州での戦争、そして韓国併合に繋がったのである。長く続いた江戸時代に歴史的起源を探ると、日本が真珠湾を攻撃し、1941年12月8日にアメリカ合衆国とその他の国々に対して全面戦争を宣言した軍事国家に変わっていく小さな一歩がこの時にあったと推測できる。

1945年8月6日、午前8時15分、原子爆弾がこの戦争に悲劇的な形で終わりをもたらしたのだが、同時にそれは新しい日本社会の希望に満ちた始まりともなった。近代的憲法と、多くの起業家、そして武士道精神のおかげで、日本は数十年にわたって際立った経済成長をなし遂げ、それによりたった40年ほどで世界でも最も裕福な国のひとつとなったのである！

(原文16ページの写真:1945年の原爆投下後に残った数少ない建造物である広島原爆ドームの前で)

寺院・神社・庭園 — その印象と回想 Mats Bruzaeus

宗教と哲学は、すべての社会における文化遺産として常に重要な要素なので、GSE チームではできるだけ日本文化を把握するために、5週間の大阪滞在中、様々な方法で神道と仏教の両方に是非とも触れたいと考えていた。傍観者としてばかりでなく、その精神的な価値をいくらかでも体験する機会を持ち、共存しているこれらの宗教が一般の日本人の日常生活にどのように影響を与えているのかを知ろうとした。また、宗教的な教えや象徴がどんなふうに公共の場所における様式や配置に現れ、織り込まれているかについても意識し、有名な日本庭園を訪ねるのを楽しみにしていた。

滞在の一週目にさっそく素晴らしい体験をした。交野天神社で、神主さんと巫女さんが、私達のために、そして私達が日本から帰る時の旅の安全を祈念して特別な儀式を執り行って下さり、全員でその儀式のひとつひとつに参加し、触れ合ったのだが、この古代・自然宗教に招きを受けたというだけでなく、歓迎されていたように感じた。本当に強烈でとても厳粛な体験で、祝福を受けた木の棒を中に入れて封印した封筒をいまだに持っている！

古代日本の首都、奈良を訪問したら、東大寺の大仏を見ずにはいられないが、一公園にいる数百頭もの神聖なる鹿だけでなく — そこでは他にも数多くの美しい寺院や神社を目にした。くぐることができれば魂が清められるということで有名な大きな木の柱の小さな穴を、あと少しで Jens は通り抜けられそうだったので、彼の魂は少しは清められたろう。この日の訪問で、間接的ではあるが、仏教についてかなり学んだと思うし、付き添ってくれたガイドの方も私達の質問に適切に答えてくれた。

広島を訪れた日には、午前中に平和記念資料館でたいへん強烈で身震いするような体験をしたが、それに対して午後は、元々

は1620年に作られた美しい縮景園(しゅっけいえん)で濯纓池(たくえいち)にある小さな島々を眺めたり、太鼓橋の跨虹橋(ここうきょう)(虹の橋)を渡ったりと、素晴らしい散策になった。

四天王寺とその庭園は二回訪れ、一回は雨がしとしと降っていて、もう一回は暖かい春の日差しの中だった。この寺は、日本に仏教を紹介したとされる聖徳太子によって593年に建立されたが、そのことは寺の壁画にも見ることができる。この庭園もとても美しく、賢明にもその道を選んだ人がお釈迦さまのそばに一歩近づくことができるという、白道(びやくどう)という極楽浄土への道がある。この庭園の真ん中には茶室もあり、内部からの眺めは非常に広々として壮観である。二回目に訪れた際には、大阪城南ロータリークラブが庭園の中に作った蛍の保護区域についても話を伺った。

住職の近藤尊師による神峰山寺(かぶさんじ)での禅体験についてはこの報告の別の章で述べるが、これこそまさしく今回のGSE 研修旅行全体におけるハイライトであり、一章を費やす価値がある。

京都にある庭園、寺院や神社をすべて見て回ろうとすれば確実に何週間もかかるので、以前は日本の首都であったこの町を訪問するにあたっては二箇所に重点を置いて訪ねることにした；まずは石庭で名高い龍安寺を訪問。しばらくの間そこにいてこの庭が何を意味しているのかを沈思黙考することは一種の禅体験であり、見る者の想像力が解放された時にたくさん自由な発想がもたらされるのだ。京都でもう一箇所“訪ねなければならぬ所”と言えば、もちろん、鹿苑寺(金閣寺)にある金閣である。複数の異なる様式で建てられたこの優雅な建物は近年、金箔を貼り直し、現在では金閣の前の“鏡湖池(きょうこち)”にその姿を美しく映し出している。

個人的には、総持寺で住職のご家族と一緒に過ごすという特別な経験もさせていただき、朝のお務めにも参加し、仏教の寺での生活というものを身近に知ることができた。多くの伽藍があって美しく変化に富んだ境内は、日本において神道と仏教が共存してきたことを少しは理解させてくれた。過去1,400年間には、ある時期これらの宗教がほとんど融合していた — と同時に、組織としてはそれぞれが独立したままであった。しかし神道の原理や考え方は必ずお寺でも見受けられたし — 神社においてはその逆もまた見受けられた。

お寺や神社、庭園を訪問し、その儀式や務めに参加したことで日本文化の基本的要素をより広く、そしてある点ではより深く理解することとなった。

禅の瞑想 Ingemar Larsson

禅とは、インドで生まれた仏教の一部門で、瞑想が重要な部分を占め、主にその目指すものとして、悟りや知恵、そして澄んだ、虚心で世の中を見ることが出来る力などが挙げられる。

禅は茶道や華道など日本文化の色々な部分に多くの影響を与えた。

座禅とは、結跏趺座(けっかふざ)(または半跏趺座(はんかふざ))して瞑想することを言い、心を落ち着かせるために呼吸をコントロールして、心のあり方に意識を集中させる。

研修中のある日、神峰山寺(かぶさんじ)に招かれ、高僧であるご住職の近藤さん(原文19ページ下の写真で柿色の法衣の方)に座禅の瞑想の仕方を指導していただいた。最初に正しい座り方や呼吸をコントロールするために数を数えるやり方を教えていただいた後、寺の中の、屋根のある通路へと移動。

雨の降る音に耳を澄まし、新鮮な外の空気を感じながら、小さな丸い座布団に座り、瞑想すること約22分、全員揃って誇らしく思ったのだが、僧侶の方たちは時に24時間瞑想することもあると聞いた。集中することが難しい人は、助けを求めることが許され

ており、木の棒で背中を激しく、強くたたいてもらうことで集中を取り戻すが、実際それで助かったし、それほど痛くもなかった。

この体験は、毎日のスケジュールがどんなにストレスの多いものであっても、自分自身のための時間を取ることの大切さを教えてくれた。

書道に挑戦 Ingemar Larsson

奈良を訪れた際には、書道の指導を受け、墨はどうやって作られたものなのか、それからどのように硯の上で水をつけて磨るのか、すてきな先生がやってみせて下さった。墨液を作るには墨を水に浸してから硯の平らな面で磨るが、それによって墨が溶け、黒い墨液ができる。墨そのものは、燃やした植物や種油や松材の煤からできている。

筆は、タヌキや鹿、その他の動物などの毛でできており、多くは複雑な140以上の工程を経て作られている。

書道は学校でも教えられているとはいえ、主にお祝いの時の記帳や葉書を書く時などに毛筆が用いられている。

春という字を一文字教わって、全員で挑戦し、9回の筆の運びによって書き上げた。この体験はとても楽しいもので、芸術というもので、そして、一生をかけて習得する技能の何たるかを垣間見せてくれた。

訳の分からない、それでもすごい茶道 Jens Ingemansson

研修の一週目にさっそく全員で初めて茶道のお茶席を体験し、それから翌月にかけて、ほとんどその作法について説明を受けないまま、平均して週に一回はお茶会に参加していた。多くの場合、その席でいったい何が行われているのか理解することは難しく、なぜこういった様々な所作やお辞儀、茶碗を順に回していく、などしなくてはならないのか？と思っていた。

が、だんだんお茶会の意味がわかるようになってきて、というか、少なくとも何かしら感じ取れるようにはなってきたのである。茶道家のお母さんと茶道教授の娘さんの家庭に滞在させていただいて、この魅力ある芸術について見識をより深めるにはたいへんよい機会となった。

茶道は、15世紀の終わりに村田珠光(じゅこう)によって創始され、日常のお茶を飲むという行為を芸術の域にまで高めた。お茶席は普通、気持ちを集中させるために、薄い和紙でできた障子と畳(日本の伝統的な敷物)のある和室(茶室)で行われる。お茶会に参加する人々は皆、直接畳の上に、できれば正座して座るが、足が痛くなった時や外国人の場合には足をくずしてもう少し楽な姿勢で座ることが許されている！

茶道で重要なのは、席主や、時に正客(参加者)も、お茶を準備したり、頂いたりするにあたって数々の作法に従わねばならないということだ。火の熾し方、お茶(お抹茶)のかき混ぜ方、正客へのお茶の出し方などそれぞれにきちんとした作法があり、免状を受けて茶道家になるには、通常、何年も何年も修行を積みねばならない。

ただお茶を出すだけにこれほどたくさんの方の作法を学ばねばならないことは、西欧の合理的な人間にとっては意味のないことのように思われるだろう。これらの作法の目指すところは、どのようにお茶を出すかを教えることではなく、今この時に集中し、周囲のものと対話する力を伸ばす助けとなることである。茶道の目的とは、正しい精神の調和と安定を作り出すことで、その人の精神の強さ、そして人や自然を理解し、関係していく力を伸ばしていくことにある。それはつまり、生け花(日本流のフラワーアレンジメント)や書道といった他の日本的な芸術とも密接に関係していくことであり、禅宗においても、その原理や目指すところは同じよう

なものである。

厳粛に正確に行われる茶道というものは、実に興味深く、圧倒される精神的経験であった！

大相撲観戦 Sofie Qvarfordt

ある土曜日の夜、全員で受け入れ側の方々と一緒に大相撲の大阪場所を見に行ったことは、最高の経験であった。狭い桟敷席で2時間近く正座していなければならなかったが、土俵(相撲のリング)はとてもよく見えた。おいしい塩味の枝豆と焼き鳥(串に刺してある)をつまみながら、すごい力士たちの取組を観戦。会場は人でいっぱい、観客の中にフランス大統領のジャック・シラク氏その人がいたのには驚いた！

相撲は伝統的な格技であり、日本の国技と言われている。古代においては農業の祭事または神事として行われ、今も伝統的な儀式に則っている。取組の始めには、化粧廻しをつけて伝統的な髷を結った力士たちの一団が列になって入場する“土俵入り”の儀式を楽しんだ。この髷、大銀杏は江戸時代の風俗から取り入れられたもので伝統を継承しているだけでなく、土俵から落ちた際に頭部を保護するものでもあるのだ！

取組はすべて数秒で終わってしまうが、力士が取組の前に行く心理的な儀式に特に興味をそそられた。中にはスポーツマンというよりは俳優のような力士もいて、その人気ぶりは観客の声援からもわかった。力士はお互いに目を合わせて睨み合い、手を横に挙げてから足を広げ、その手を膝に置き、足を踏み鳴らすように片方ずつ足を上げ下げする。そしてそれぞれの力士が一握りの塩を土俵にまくのだが、これは対戦の前に悪を払い、力士自身と土俵を清めるためである。年に6回行われる大相撲の本場所巡業において、一日に約45キログラムの塩が使われるという！

今回の場所ではモンゴル出身の若手力士、朝青龍が優勝し、最後の技が決まった瞬間、観客は熱狂した。この取組が終わった直後、人々が座席の座布団を土俵に向かって(届かずに観客の上に落ちるのだが)投げ始めたのには驚いた — 優勝の喜びから投げる人と、怒りにまかせて投げる人と！私達は飛んでくる座布団から身を守るのに必死だった！

大阪場所を見に行ってから、2、3週間後に、運良く受入家族と一緒に伝統的な相撲料理の店を訪れる機会があった。

アットホームな雰囲気のお店で、ごった煮を意味する、ちゃんこ鍋という素晴らしくおいしい伝統的な相撲部屋の食べ物を頂いた。受入家族の方の解説によると、力士はこの鍋を食べてすぐに横になって眠ることで体重を増やし、あの体を作っているというので、鍋を食べた後に眠らないよう気をつけた！店には古今の有名な力士の写真が飾られていて、さながら相撲資料館といったかんじでもあり、力士だけでなく色々なお客さんを集めていた。この店に連れて来てもらえてたいへんよかったし、他の人にもお勧めできる店である！

お花見 — 桜の花を愛でる Lisa Kirsebom

日本語で桜というこの木とその花は日本を象徴するものとしてあまりにも有名であり、日本人に深く愛されている。桜の花びらの形と色は日本人の理想的な概念である清らかさと純真さを示すと言われている。人々が心惹かれるもうひとつの理由はその命の短さにあるだろう — 桜の花はほんの一週間ほど咲いて散ってしまうが、その間中、桜の木の下はそよ風に散った桜色の花びらで覆われるのである。

桜の花は、だいたい3月の半ば頃に南の方から咲き始め、北へと広がってきて、大阪では3月の終わるか4月の始めに咲く。テレビのニュースでは毎日の

ように桜前線がどこまで来ているか言っており、新聞は開花から満開までその経過を載せている。2005年の春はいつになく寒く、そのことが私たちのスケジュールにもいくらか影響した…。

日本人々は、外に出て、家族や友人、同僚たちと桜の木の下で花見というピクニックをして開花を祝う。この伝統は、その昔、貴族が桜の木の下で和歌を詠んだり、歌を歌ったりしたことに始まり、少なくとも150年前から人々の間に広まった。今日では和歌はあまり一般的でなくなり、かわりにビールや酒を飲み、それぞれ自分の携帯電話で花の写真を撮るのが現代流である…。それでも桜の開花を祝って特別な歌が歌われることもある。

すでに私達が日本に着く前に、3月31日ー昨年(2004年)はこの日に桜が満開だったのでーにお花見の予定になっていたが、残念なことに今年(2005年)は寒かったため桜はまだつぼみしか見られなかった…。が、いずれにしても千里メイプルロータリークラブが私達のために屋外で(1970年に日本でEXPO'70万国博覧会が開催された万博記念公園で)パーティーを開いて下さり、バーベキュー用のたくさんの食べ物、果物と飲み物が用意され、そして歌も歌ったのである！たいへんに楽しい時間を過ごし、チームメンバーと、この時の気候や全体の雰囲気やスウェーデンの祭、Walpurgisの夜を思い起こさせると言い合っていた。この祭は、たとえどんなに寒くて風が強くて人々が屋外で宴会をするよい機会ともなっており、自然の力に逆らって楽しむものなのである！

大阪での最後の週末、桜の花は満開に咲き誇り、天気も最高であったのでピクニックのお弁当を持って大阪城公園に歩いて出かけた。そこにたくさんの人々がお花見をするために来ていたのには全く驚いた。公園内の一部では、文字どおり人の流れに渋滞が起きており(ちなみにこの公園は、大きな公園である)混雑で前にも後ろにも進めないほどだった。やっとの思いでちょうどよい、静かな場所を見つけたーもう花の時期が終わった梅の木の下である。そのあたりに他に誰もいなかったのは、日本人にとって桜の木の下以外の場所でお花見をすることはその自尊心が許さないからだろうと思う…。Mats Bruzaeusによれば、本当の花見で一番すごいのは、酒を注いだ盃の中に花びらがひらひらと舞い落ちてくることだと言う。むろん、私達が選んだその場所では無理なことだったが、それでも楽しい時間を過ごした！

日本人々との出会い Lisa Kirsebom

スウェーデンの人々と日本人の間には実に多くの共通点がある。例えば、どちらの国でも、人が集団の中でうまくその役割を果たすことが大切だと考えられていることー集団の考えに対して異議を唱えたり、これまでと違った新しいことをしようしたりする人間であるよりもっと大切だと考えられている。人が自分の強みや長所を強調しすぎないことが礼儀だと考えられており;常に控えめな態度で、自分の成し遂げたことについても謙遜することが良しとされる。

しかし、もちろん、スウェーデン人と日本人には違っているところもある。GSE チームの全員が何度となくそういった違いを体験し、混乱したり、興味をかき立てられたりー時には苛立ったりもした。

“日本人々が、精神のバランスをとるために、心の調和(インナーハーモニー)に意識を向けていることは興味深い。スウェーデンでは、この分野は興味の対象としてはかなり新しいもので、こういった考えを受け入れて、理解し、生かしていくことができるのはだいたい女性である。日本では精神の鍛錬というものは数百年、あるいは数千年にわたって続いてきており、この分野での色々な仕事は本来男性のものとしていた。”

Jens 談

言語とコミュニケーションについて

“明らかな言葉の壁があっても、コミュニケーションを取り続けることは可能である。多くの日本人は学校で何年も英語を学んでいるが、英会話の能力はそれほど高くない。それでも意志のあるところにしばしば道は開けるもので、自分の考えを相手に理解してもらおうと、表示を指差したり、絵を描いたりしていろんな会話をした。”

Ingemar 談

“今回の研修旅行の前に、チームの内4名は日本語のレッスンを2回ほど受けたのだが、日本語というものはとても美しく、そしてまた難しくもある。3つの異なる文字で表記されるというだけでなく、あいまいで婉曲な表現がたくさんあることもわかった。”

Sofie 談

スウェーデン語においては、批判を丁寧な言い回しで包み隠し、(できれば)言いたいことが伝わるまでその話題を続けることがよくある。しかし、その他ほとんどの場合、スウェーデン人はかなり率直な言い方をするし、明瞭で明確なのが良いとされる。それに対して日本では、たとえ、事実そうであり、慎重を要するような内容でなくても、何かを断言するということは、無遠慮で無礼だと考えられていると知った。“たぶん”とか“恐らく”といった言葉が頻繁に使われ、この二つの言葉の意味を考え過ぎたばかりに、日本人の友人たちの言っていることを何度も誤解してしまった。この不明瞭さを日本語では“あいまい”と言う。

スウェーデン人の運転手が車から降りる乗客に向かって“たぶんセーターを持って行った方がいいですよ”と言ってくれたら、それは、今日は寒くなりそうだから、ということだろう。この言い回しはひとつの提案にすぎないので、乗客は“いや、いいです、なくても大丈夫だと思うので”というように答えたりする。が、日本人の運転手が同じことを言ってくれたら、それは確実に“あなたはもうこの車には乗らないので、セーターは持って行って下さい”ということなのである。(しかし、自分の意見を述べることは礼儀に反するのだ。)こういった言い回しの違いが時に私達を混乱させたが、日本の受け入れ側の人たちが自然といつも礼儀正しく助け舟を出してくれた。

“日本人は、相手が何も知らないという前提で率直に物を言うことは失礼だと考えている。相手がそれを知っているのであればわざわざ率直に言う必要はないと考えて、あいまいであることを好み、重んじている。自分の考えをはっきりと述べることは相手が何も知らないと言っているようなものなので、だから率直な表現は失礼だと考えられているのだ。ー あいまいであることは誤解を招くこともあり、日本人がイエス・ノーをはっきりと言えないようなので、よその国から来た人々は時としていらさせられることになる。”

Roger J. Davies, Osamu Ikeno 著・編集、“The Japanese Mind” 11 ページより

しかし時折、コミュニケーションをとりようとする相手との間に、言葉の壁だけではない何か立ちちはだかっていた。私達の心の中に何かよくわからない、乗り越えられないものがあるのだ。それは、日本人の友人たちが私達の本当に求めているものとは違う何かについて聞いてほしいと思っているような時に、その誤解を解くのにとても時間がかかったりする、といったことである。夕食の席で例えば失業問題に対する国の支援制度について会話がはずんでいたかと思えば、次の瞬間には、会話していて、翌日の朝9時30分に出発するのか、それとも目的地に9時30分に着いていなくてはならないのか(それならもっと早く出発しなくてはならないのだが)理解することがほとんど不可能に近かったりと、混乱させられたりもした。この考え方や“考え方のパターン”のどこに違いがあるのか、私達の誰にもわからなかったが、それは明らかに、疑いようもなく、そこに存在しているのだ。

“そう頻繁ではなかったけれども、時々、ミーティングの始めに沈黙が流れることがあり、受け入れ側の方々がミーティングを始め下さるのか、私達が始めなければならないのか、わからないことがあった。後になって、沈黙に関する理解が異なっていることを知ったわけで、日本人にとっては、沈黙は良いものと考えられており、深い思考や検討を物語っているというのだが、一方スウェーデンでは沈黙は人々を不安にさせてしまうものなのだ。滞

在中に日本語が上達し、短い自己紹介なら日本語でできるようになった。

Sofie 談

責任と自立について

この国では、受け入れ側や色々な手配をして下さった方々がその責任を果たすことが非常に重要とされていると日本に着く前に言われていて、実際にそうであると何度も感じた。ゲストの人々に心地よく安全に過ごしてもらおうと同時に、喜んでもらい、満足してもらおうために個人が負っている責任は決して妥協が許されるものではなく、投げ出すこともできないのである。これは受け入れ側の人たちが、受入家族であろうと、会社や博物館に付き添って下さったロータリアンや歓迎して下さった委員であろうと、いつも精一杯私達の面倒を見てくれたことでもわかる。まるで王様のような気分にしてくれたのである。

しかし、ただ王様のように扱ってもらっていただけでなく、自分たちだけで危険な冒険に出かけることが許されないぐらい大事にされていた。この“問題”の根幹にあるのが、私達の安全に対する行き届いた配慮なのは充分わかっているが、それでも時には少しばかり閉じ込められている気分になるのは否めない……。

GSEチームのメンバー全員が、スウェーデンに帰れば、両親とではなく、それぞれ自分たちの家庭を持って暮らしている。自由に一人で地下鉄に乗ったり、歩いたりするのに苦労しなくてはならなかったことは、時として困難だった。メンバーの男性よりも女性の方が少し目立ただろうし、ましてや妊婦は他の人に比べてさらにもっと目立ただろう — とはいえ、メンバー全員が人々の注目を浴びるという経験をした。

“両国の最も大きな違いは、日本の若者は両親と一緒に暮らしており、人生において長い期間、両親に依存していることだと思った。依存する、ということは、日本文化の重要な要素であり、一般的に若者がかなり若いうちに両親から自立しようとするスウェーデンの文化とは対照的である。”

Sofie 談

受入家族について

“受入家庭での日常生活体験はとても興味深いもので、違う国、ましてや違う大陸からやって来たけれど、異なる文化や生活様式にも慣れた。全員が以前からよく旅行していたとは言え、ほとんどのメンバーにとって、何週間も受入家族と暮らすというような機会は今までなかったことである。本当の日本人の優しさや寛大さをはっきりと感じられたのも受入家族と過ごしていた時だったし、たいへん歓迎され、感謝している。”

Ingemar 談

時折、高級で高価な贈り物を頂いたりしたが — それよりも、受入家族の方々が、自分たちの時間や生活スペースを快く提供して下さい、個人的な考え方や意見を言う時にも示して下さい、寛大さほど大切なものはなかった。コミュニケーションをとる上でよく問題が起こったが、必ず解決できたし、場合によっては、食事の時に、友人や親戚、知り合いの人などが通訳に役買うために招かれていた。こういった方々は、ただ私達と受入家族の人たちが楽になるようにと、遠いところからわざわざ時間をかけて来て下さっていて、いつもたいへん有り難く思っていた。

受入家族の方々と過ごした時間が恐らくこの研修旅行全体で何よりも一番重要な部分であっただろうが、週末ごとに一泊だけホテルニューオータニに滞在したことは予定がぎっしりの研修プログラムをやり終えるために大いに役立った。ただ自分の時間を持って、何かに拘束されているような感じから全く解放されたことが素晴らしかった。(ホテルそのものがあのように豪華だったのは、確かに最高のボーナスだった — でもどんな場所であれ、プライベートな時間を持つことができれば、とてもいいことだろうと思う。)

多くの受入家族が、送ってくる時間をなるべく遅くしようか、もっと早く迎えに来ようかと言って下さったのだけれど、ぜひとも土日

は、決まった時間に(ホテルに)送迎してもらえればうれしい、ということを手重に説明するのはとてもたいへんだらう。なかには、土曜日まる一日の活動や外出を意欲的に計画して下さる受入家族もおられたが、たとえそれがどんなに親切な心遣いであったとしても、そういうふうの手配されると、私達の“予定された一週間”が急に土曜日の夜にまでずっと長引くことになってしまうのである。どんなに楽しくて興味のあるものであっても、それでは疲れてしまうだろう。これから GSE チームに参加される方たちやその受入家族になる方たち(家族だけでなく、受け入れ側のクラブの方たちも)に、次のことはぜひお伝えしておきたい; プライベートな時間を持つことは、翌週に向けて精神的にも肉体的にも活力を取り戻す上で欠かせないものであり、どんなに善意の申し出があったとしても、これだけは譲らないでほしいということ。“新しい家族に受け入れて頂く度に楽しい歓迎会を開いてもらって、その家族の子供たちや孫たち、友人や近所の人もみんな一緒に歓迎して下さい。言葉や文化の全く異なる見知らぬ国へ来た時にはこんなふう温かく迎えて下さることで、自分たちが歓迎されていると感じられることはとても大切なのだ! 子供たちの中には外国人にあまり慣れていない子たちもいて、私達に興味しんしんなのがとても可愛らしかった。受入家族の中で時間を過ごしたことも、日本の異なる習慣や伝統を知るのにもとてもいい方法だった。正座したり、夜は伝統的な日本のお風呂に入ったり、また、布団で眠り、箸を使って食事をしたことは新しい経験だった。”

Sofie 談

おわりに

5週間にわたって日本で過ごす機会を得たことは、GSE チームとしてだけでなく、私達にとって言葉で言い表せないぐらい大きな意味を持つことでした。今回の研修旅行での体験や出会いは一生忘れないでしょうし、個人的にも仕事上でも私達に影響を与えました。

私達全員から — 今回の研修プログラムすべてを可能にして下さった国際ロータリー、ロータリー財団、そして大阪の第 2660 地区の関係者の皆さんに心より御礼申し上げます。これから世界中にたくさんおられる GSE プログラムの学友の一員になれることを誇りに、そして有り難く思いますし、新しく得た文化知識を人々に伝えていくことができれば、と願っています。

この報告のスポンサーの方々に — どうもありがとうございました!